
—大好き— ～短編集～

三月 亜莉棲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

―大好き― ～短編集～

【Nコード】

N1347Y

【作者名】

三月 亜莉棲

【あらすじ】

その名のとおり、短編集です☆

名探偵コナン、ハリーポッター・・・はたまたオリジナルでも！

リクエストをくれたら何でも書きちゃいます☆

ご挨拶☆

おはこんばんわ（笑）

華逗葉です☆今回あたくしは念願の短編集をすることにしました
あ！

はじめりゃ良かったんですけど、
しばらく書いてないとかそういうの読者側だったらと思うと
いやなんです！

やっぱり読んで欲しいですもんね☆

なのでリクエストたつくさくさん！まっています☆

なんでもかきますよお☆

ただし苦手なc pはNGですよ？
まあそこら辺はプロフィールを見てくださいな☆

そしていまこの小説を見てくれているあなた！
よかったら一個でいいのでリクエストお願いします！

頑張って書きますんでよろしくです！

そしてこれからご指摘やお褒めの言葉、
たくさんお待ちしてます！（お褒めの言葉は多くてもすくなく
ても・・・）

2
0
1
1.
1
1.
1

華
逗
葉

パーティーのあとは・・・(前書き)

平和です☆

やっぱり鈍感平次が面白い(笑)

オリキャラでますよ☆

パーティーのあとは・・・

「なんよ・・・平次、どうする？」

いま和葉は今度の土曜日にある、知り合いの令嬢（以外にも母親関係で）の家で開かれるパーティーに出るか平次に問いかけている。

平次は

「行くにきまつとるやろ！！久しぶりに圭吾にあえるんやで！」

「やっぱりね・・・じゃあ嘉穂に話しとくわ。」

「おお！」

嘉穂と圭吾は双子。

嘉穂は令嬢ということをあまり強調しないタイプで圭吾も御曹司ということはどうでもいいと思っているらしい。

そして和葉は嘉穂、平次は圭吾と仲がいいのだ。

パーティー当日――

「嘉穂！パーティー呼んでくれておおきにな！」

「和葉！ええんよ？うちはいろんなこと仲いいしあんだのお母さんとは仲ようさせてもろうとるんやから！」

「そんなことないで？」

「結構うちの母さんとあんたんとこのお母さん仲ええし、そういや！（まだ平次君とは『幼馴染なん？』」

「そんな当たり前やないの！！」

「そんなどならんくてもええよ。」

「あっごめんなあ。」

「圭吾久しぶりやな。」

「おう！久しぶりやな平次。（いまだに和葉ちゃんとは『幼馴染なん？』」

「あたりまえやろ！！」

「そんなどならんくても・・・」

「すまん。」

「嘉穂お〜」

「は〜い！ 昴もうちよつとまってえ。ごめんな？ 和葉。いかな。」
「うん！ いってらっしゃい！」

「ごめんねえ」

「圭吾さん？」

「あっ千春ちゃん。」

「いけや。彼女さんとかいったり？」

「ああすまん。じゃあな。」

二人とも最愛の彼女、彼氏のところに行ってしまった。

「つまらんなあ・・・」

「しょうがないやろ？ まあ俺的にはもう帰ってねたい。」

「こんの、お眠り寢坊男。」

「しゃーないやろ。」

「じゃあさ。あたしもいいいい？」

「いいで・・・ほな、いこか・・・」

「うん！」

こんな感じで仲良く二人はパーティー会場をあとにした。

泣きたい　―慰めてくれた彼女と俺をふった彼女―（前書き）

コ哀です・・・

初めてでうまく書けるかわからないのですが・・・

彩高さんのリクです。

コナンと哀視点です。

（最初がコナンで途中哀に変わります）

泣きたい――慰めてくれた彼女と俺をふった彼女――

俺は、蘭にふられた。

薬を使って一日だけもとの姿に戻った。

だが、蘭の横には違う人がいたんだ。

それは、『快斗』だった――

学校――

「おはよう！コナン君！」

「ああはよっ。」

「おはよう。吉田さん、江戸川君。」

「おはよう！哀ちゃん！」

「・・・」

歩美はどこかにいってしまったあと、

「話は聞いたわ。蘭さん、結婚するんですって？」

「ああ。これも定めだな。」

江戸川君・・・。

数日前、彼は薬を使って一日、元の姿に戻り蘭さんに会いに行った。

その矢先、蘭さんに『私たちね、結婚するの！』と言われてしまったらしい。

『じゃあ俺は？』と聞いたら『私たちそんな関係だったわけ？』と返され、

工藤君と蘭さんの恋はいつの間にか自然消滅してしまっていた。

黒羽君の相手、青子さんはお見合い相手と恋に落ちて今度結婚予定、

服部君と和葉さんも今度結婚する。

そんななか、彼は置いてきばりにされてしまった。

可愛そうな江戸川君、

可愛そうな工藤君。

「ねえ。私じゃ駄目かしら？」

「哀・・・」

「ああ。
哀が俺の心を癒してくれよ？」

泣きたい ―慰めてくれた彼女と俺をふった彼女― (後書き)

どうだったでしょうか？

正統派以外はあまり得意ではないのでむずかしかった(；´∩｀)
グツタリ

またリクエストお待ちしております☆

やきもち (前書き)

亜由美ちゃんのリクです☆

新一と蘭のやきもちは難しいので、
そのまんまですが、あたし的に

チビ新蘭を書きたいのでチビ新蘭の周りの女の子のやきもちで☆

ほんとごめんなさい (涙)

亜由美ちゃん。ごめんね？

やきもち

「ねえねえ工藤くくくんスリスリ、（＊」「（＊」
ノノスリスリ遊ぼうよお！」

キヤツキヤツ

また・・・

しんいち、なんで他の女の子と一緒になの？

あたしだってしんいちと一緒にいたいのに・・・

「らん、今日放課後どうする？」

「へっ？」

「だから！放課後！朝いったじゃねーか。」

「ああ！おば様に会いに行くってやつ？」

「そうそう！でっ、どうする？」

「行く行く！！」

ジローーーーー！

うそ！？なんでみんなあたしをにらむの？

別に、ただ単にしんいちの家に行くだけなのに・・・

昼休み

「ねえねえ毛利さん、こっち来て？」

「なに？」

ここは学校の校舎裏。

「ねえ毛利さんって工藤君のなんなわけ？」

「そうそう、意味わかんないんですけどー！」

「いっつも工藤君にべたべたしちゃってさーー！！！」

「そっそんな・・・あたし別に・・・」

「「「あんだなんてこうなっちゃえーー！！！」」」

ザバツ

ポタポタ・・・

「キャハハハハ！いい気味ー！」

「アハハハハ！」

トタトタツ

いっちゃった。どうしよ・・・

こんなびちよびちよだったら教室にも戻れないし・・・

パサッ

えっ？

「しんいち？」

「大丈夫かよ。俺の上着着とけ！」

「うん！」

しんいちの着ていたパーカー。
今日すっごく寒いのに・・・。

「しんいち。」

「あんだ？」

「ありがとう。寒くない？」

「ああ。大丈夫だ／＼。」

あたしはしんいちに笑顔を向けた。

そのときあたしはしんいちが真っ赤だったのは気付いたけど

何でなのかわかんなかった。

蘭の不安 ―勘違い?― (前書き)

蘭は最近頻繁に新一がある家に出入りしているのを見てしまった。そして蘭の不安は新一が構ってくれない事からどんどん増していき、新一の探偵仲間、『服部平次』に調査を依頼する・・・。

→のはまああらすじですね☆

L i q u e u rさんのリクです^^

気に入ってくれるとうれしいな☆

蘭の不安 ―勘違い?―

(なんで俺がこんなこと・・・)

探偵『服部平次』はただいま依頼を成し遂げるため
ある人物の尾行中。

それは同じく探偵の『工藤新一』である。

事の始まりは2日前・・・。

――2日前――

「どうしたんや? よりによって工藤やのうて俺を呼ぶんはなんか
理由があんのやろ?」

平次は親友の彼女、『毛利蘭』に呼び出された。

「あのね・・・その、服部君に新一の調査を依頼したいの。」

「は? 話が見えんのやけど。」

「だからね・・・? 最近調査っていつてあるお屋敷を出入りしてる
の。」

「じゃあええやないか。」

「それが、新一にしては調査の期間が長い気がするの。」

「どんくらいしとるんや？」

「1ヶ月・・・」

「1ヶ月!？」

そう、この手の調査なら1週間もたたずに解決してしまう新一がそれを1ヶ月もしているなんて・・・服部は驚いてしまった。

「なんの調査か聞いとるか？」

「たしか、浮気調査だったと思うけど・・・」

「浮気調査なんかに1ヶ月!？長すぎやろ・・・」

「だからそれなら新一と仲がいい服部君に頼んでみればいいかな
と
思
っ
て。」

「わかった。調べてみるわ。そのお屋敷ってどこやねん？」

「ココ、地図渡しとくね。」

「ほお・・・結果がでたら電話するさかい。」

「ありがとう。服部君! そうだ! 和葉にもよろしくね?」

「ああ。ほな。」

そのお屋敷に来て見たらびっくり。

「こりゃまた、けったいな屋敷やなあ・・・でかい。」

そう、下手すれば園子の家よりでかいくらいだ。

『失礼します。』

新一が出てきた。

「おい。工藤。」

「服部？なんでお前ココにいんだよ。」

「それはそうと。お前はなんでそんなけったいな屋敷に出入りしとるんや？」

「ああ。浮気調査でな。」

「それでも姉ちゃんに聞いたらもう1ヶ月やそうやないか。」

「まさか蘭に頼まれたのか？」

「まあな。ほんでどうしてや？」

「それがよお。調査は終わったんだがココの奥さんに気に入られちまって・・・

なんか娘さんとのお見合い話が持ち上げられちまって。それになんか毎回理由つけて

『来てくれ』ってゆーんだよ。逃げようがなくてよ。それにこなかったら一日中、

電話で家がうるせーんだよ。」

「お前ん宅、電話いくつあるんや？」

「数え切れないほど・・・」

「そういうことか・・・奥さんに婚約者がいることはゆったんか？」

「ゆったが聞いてない。」

「こりや大変やな。」

「蘭にこのことはいいっていいぜ。それとこの件何とかするの手伝ってくんねーか？」

「俺はいいで。じゃあ姉ちゃんにゆーとくわ。」

「ああ。頼む。」

こんな感じで蘭の不安は少し収まったが、お見合いの断りに行くため、新一は蘭を巻き込んでしまいとてつもなく罪悪感に襲われたのであった。

蘭の不安　―勘違い?―　（後書き）

どうだったでしょうか？

Liqueurさん。

感想等お待ちしております♪

初めてのデート（前書き）

衣川 蛍さんのリクです☆

チビ新蘭のサブタイのとおりです（笑）

ちょっと付け加えてあるカップルがチビになって出てきますよお（笑）

気に入ってくれるとうれしいなO（＊＾▽＾＊）O～♪あはっ

初めてのデート

今日は初めてのデート。

蘭は少し気合を入れて可愛い水色に白の花柄のシフォンワンピースを着てきた。

約束は、午前10時。

大抵のデートの待ち合わせ時間である。

蘭は周りで少し気に入った店があったため、早めに家を出たものの時間通りに待ち合わせ場所『駅前の噴水の前』についた。

丁度、向こうから新一も来ていて待たずにすんだ。

「いこうぜ。」

「うん！」

もちろん、デートの行き先はトロピカルランド。

「ミステリーコースターどこだっけえ・・・」

「こっちじゃなかったか？」

「ああそうそう！」

すると・・・

「なによお!!このバ快斗!!」

「なんだと!アホ子!!」

そう、蘭と新一の反対方向から青子と快斗が喧嘩しながら来ていた。

「なにしてんだよ。快斗。」

「お!新一じゃん!」

「蘭ちゃあーん!」

「おはよう^^青子ちゃん。」

そうこうしているうちに、新一と蘭と快斗と青子は一緒に行動する事になってしまった。

蘭と新一は二人で行きたかったのだが、青子がとてつもなく快斗を不服そうな目でみるため

蘭と新一は一緒に行動する事にした。

午後3時45分・・・

「青子ちゃん、ごめんね?ちょっと行ってくるからまって?」

「?うん。Ok!」

「ってことで、快斗もな。」

「お、おう?」

タッタッタッタッタッタッタ・・

「急げ!間に合わねーぞ!」

「まってよお!新一!」

3時59分・・

「はぁ、間に合ったね。」

「そうだな。」

ピッピッピッピ。

シュワーーーーーッ

噴水がいつせいに、綺麗なライトとともに動き出した。

「わぁ!!綺麗!」

「そうだな。」

「ねえ、新一。」

「なんだ？」

「これから一緒にいてね？」

「あたりめーだろ！」

二人の影が重なった。

その頃、青子と快斗は・・・

「ほお、熱いねえ♪新一と蘭ちゃん（笑）」

「ほんとだあ♪ラッブラブウ♪」

「青子はさあ。俺とどうしたいわけ？」

「へっ！？そ、そんないきなり言われて・・・」

青子は目を閉じた。

快斗にキスされてとってもうれしかったから・・・

これで双子並みに似てる二つのカップルはめでたく
成立（？）かな♪

初めてのデート（後書き）

どうだったでしょうか？

感想等お待ちしてまあす☆

S u n f l o w e r —太陽の花— (前書き)

平和です (笑)

やっぱ関西弁かわええ (あたしも関西弁はいつてますまあ父が大阪出身なんでえ)

感想よろしくお願いしまーす☆

Sunflower ―太陽の花―

「平次？そろそろ起きんと蘭ちゃんたち待ちくたびれてしまうんやけど」

「ああ・・・やばい。頭いたいわ・・・」

「大変やないの！！薬は？」

「大丈夫、慣れとる。いつもやから、寝不足で頭がいとーなるのわ。」

「じゃあどうする？行く？向日葵畑。」

「行くわ。大丈夫や、いつも授業中この痛みにたえとるんやから。」

「じゃあはやくしてや？」

「おお。まっとれ。」

今日は、蘭ちゃんたちと一緒に向日葵畑に行く事になったんやけど（蘭ちゃんが旅行券を当てちゃったんや）

平次、前日に事件に出とって一睡もしとらんかったんやけど、無理言って平次もきたんや。

「おまたせ。いこか。」

「いこういこう！」

「せやね！平次、ほんとに大丈夫なの？」

「ああ！もちろんや！」

あのあと、うちらはとことん遊びとおし

別行動になったんや。

「なあ平次、ほんとに大丈夫なん？」

「きつーなってきたけど・・・まあ大丈夫や。」

「すわつとこーや。そのほうがラクやろ？」

「すまん。」

うちらは二人でベンチに座ったんだ。

「なあ和葉。お前、自分ってどんな感じやと思う？」

「自分のってイメージ？」

「そや。俺はまあ普通の男子って感じやけど・・・」

「あほなあ！んなわけないやん！平次は推理オタクさんやろ。」

「なんやと！」

「でも、あたしってどんな感じやろ。平次、あたしを花でたとえてみてやあ。」

「花かあ・・・向日葵やないか？」

「向日葵？なんで？」

「明るくてまあ太陽みたいな感じやから。」

「太陽・・・でもなんで太陽が向日葵なの？」

「忘れたんか？向日葵は英語で・・・」

「S
u
n
f
l
o
w
e
r
(太陽の花) っていうやないか。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1347y/>

—大好き— ～短編集～

2011年11月17日05時02分発行